

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：22501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593307

研究課題名(和文) 育児困難な乳幼児の孫をもつ祖父母に対する孫育児支援方法の開発と検証

研究課題名(英文) Development and evaluation of the program for grandparents rearing grandchildren with special needs

研究代表者

石井 邦子 (Ishii, Kuniko)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授

研究者番号：70247302

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：育児困難な乳幼児の孫をもつ祖父母特有の孫育児における体験が「孫の疾病や障がい強い衝撃にもがき苦しみ、徐々に回復・安定へと向かいつつも希望と落胆の間を揺らぎ続け、息子/娘夫婦を支える立場に身をおき続け、常に気遣い見守る」ことから、「ありのままを受け止め自分らしく孫育児を行い、家族間の情緒的きずなや家族機能の安定に自分自身が関与していると認識できる」ことをめざした孫育児支援プログラムを開発し実施した。プログラムにより、孫育児を通して自己実現ができているとの認識が強化されることを確認した。

研究成果の概要(英文)：The experiences of grandparents rearing grandchildren with special needs began with the grandparents struggle against the initial extreme shock, followed by swings between hope and disappointment. Next, they focused on recovery and stabilization, and finally accepted the grandchildren's disorder. The grandparents supported their sons or daughters' family, and kept a close and gentle focus on their children's parenthood. These experiences gave them a sense of accomplishment, so we developed the program to help grandparents accept the things they are able to do as grandparents in their own unique way, and strengthen family relationships and functions to achieve grandparents self-realization. We confirmed the program was to strengthen the recognition of grandparents that they can self-realization through the rearing grandchildren.

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：生涯発達看護学

キーワード：祖父母 育児困難児 孫育児支援

1. 研究開始当初の背景

(1)孫育児支援に関連する国内・国外の研究動向：我が国では、乳幼児の育児が両親の親すなわち乳幼児の祖父母の協力のもとに行われる伝統的スタイルが、今もなお一般的である。しかし、祖父母による育児サポートに関する報告は、両親の **Well-being** の視点から祖父母のサポートの適切性に着目したものであり、孫育児の担い手の一人である祖父母自身の **Well-being** に着目したものではない。祖父母による育児サポートが重要であるのは、正常経過をたどる乳幼児に限ったことではない。むしろ、疾病、障害、成長発達の遅れ等を有する乳幼児の場合、成長発達を左右する日常生活がスムーズに営まれない、育児にあたる両親の身体的心理的負担が大きい、という実態から、祖父母の育児サポートに対する要求や育児サポート上の困難がより深刻であると推測される。NICU 入院児、先天性疾患を有する児、心身障害児、多胎児をもつ家族において、祖父母は、主たる養育者である母親にとって、夫、知人・友人、医療関係者に次いで重要なサポート提供者と位置付けられており、育児や家事等の実質的なサポートを担い、母親の身体的負担の軽減において有用であると報告されている。しかしここでも、祖父母は母親の育児のサポート者と捉えられているにとどまり、祖父母自身の **Well-being** に着目した報告はない。

孫育児支援に関する国外の研究動向をみると、薬物依存、精神的疾患、若年出産等、育児遂行能力が著しく低い乳幼児の母親に代わって育児を代行せざるを得ない祖母に対する育児支援に関する米国の報告がある。しかしこれらは、母親の心身状態や生活状況に関連する問題が大きく、本研究の視点とは異なる。これは、家族が夫婦を軸として構成され、家族機能が夫婦により遂行されるという米国の文化的背景を反映している。わが国と同様に拡大家族での家族機能を遂行するアジア諸国からも、祖父母に対する孫育児支援に関する報告はない。

(2)これまでの研究成果と着想に至った経緯：我々は、乳幼児期の子どもをもつ家族への育児支援プログラム開発の一環として、祖父母に対する孫育児支援プログラムの開発に取り組んできた。祖父母が孫育児に参加する当事者の一員であるとの視点に立ち、祖父母自身の **QOL** 向上をめざすこととした。実態調査を経て、「祖父母の **QOL** 向上につながる孫育児」とは、「孫の養育が順調に進み、父母を中心とした家族関係が良好であり、祖父母たちがこれまでの経験を生かして父母の育児と孫の成長に貢献できていると実感すること」であり、**A.孫育児力向上**、**B.家族関係調整**、**C.エンパワメント**の3つが「祖父母の **QOL** 向上につながる孫育児」の構成要素であることを明らかにした。

本研究では、育児上の困難を有するハイリス

ク状態にある乳幼児（以下、育児困難児）の祖父母を対象とする。孫の身体状況に応じた育児自体の問題があり、両親の育児負担が大きく、祖父母の育児サポートに対する期待度が増す。祖父母にとっては、自己の育児経験とは異なる孫の個別性に即した育児を実行していくという課題に直面する。祖父母の身体的負担や心理的負担は大きく、孫育児が思い通りに遂行できないリスクを有している。親の育児負担を軽減できない、孫の成長発達が順調ではないなど、孫育児がうまくいかない場合、祖父母は家族内役割を十分に果たせていないことに落胆し、これまでの人生経験、育児経験に基づいた自己価値を否定することになりかねない。育児困難児の孫育児においてこそ、祖父母が両親とともに孫の誕生や成長を喜び、自らの経験を生かして困難な孫育児をやり遂げていると意味づけられることが大切であり、そのための看護方法の開発は急務であるとの発想に至った。

(3)当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義：育児困難児の祖父母は、手のかかる孫を受容し、孫の育児に苦慮する両親を支える責任を負うという課題に直面している。同時に、困難な孫育児を遂行し、家族関係を良好に保ち、自分自身の心身の健康を保つことに奮闘していると考えられる。これまで、育児困難児の育児に関する看護援助は、乳幼児の成長発達の促進と母親の **Well-being** に注目してきた。家族の一員として孫育児を担っている祖父母に対する看護援助は後回しにされてきたのが実状である。祖父母を看護の対象者ととらえ、祖父母に対する看護援助を導き出す研究はこれまでに例がなく、独創性が高い。本研究で開発する孫育児支援により祖父母の孫育児遂行能力が高まることで、育児困難児の成長発達の促進、治療や療養上の問題の解決、症状コントロールの改善などが期待できる。このことは、育児困難児の両親の育児上の問題を軽減することにつながり、育児困難児とその両親の **Well-being** をもたらすものである。また、祖父母の孫育児遂行能力や家族関係調整力が高まることで、家族機能が向上し、育児困難児の育児に関連する家族内の問題を家族の力で解決するという家族の育児対処能力の向上につながる。

本研究で焦点をあてた孫育児のスタート時点は、育児困難児が家族に加わり、家族機能に変化する時期であり、祖父母にとっては人生の終末まで続く孫育児のスタートとなる。高齢者の **well-being** の視点からみると、孫育児が、家族内役割や社会的役割を遂行し、次世代を支えるという発達課題の達成をもたらし、生きがいや自己価値、人生終末の受容につながるといわれている。孫育児がうまくいくように支える看護援助は、高齢者の **well-being** に直結する、価値あるものである。

## 2. 研究の目的

(1) 育児上の困難を有するハイリスク状態にある乳幼児の祖父母の孫育児の実際と「自己の QOL 向上につながる孫育児実践」という目標の達成状況、及び目標達成を左右する要因を明らかにする。

(2) 育児上の困難を有するハイリスク状態にある乳幼児の祖父母の「自己の QOL 向上につながる孫育児実践」を可能にするための孫育児支援方法を考案し、その実施と評価により、実用・普及の可能性と課題を検証する。

## 3. 研究の方法

(1) 【研究Ⅰ】 育児上の困難を有するハイリスク状態にある乳幼児の祖父母(以下、育児困難児)をもつ祖父母の孫育児の実態把握

①対象: 育児困難児をもつ祖父母 20 名程度。協力施設の紹介により、育児困難児の孫育児に何らかの形で参加している祖父母を紹介してもらい、承諾が得られたものを研究対象とする。協力を依頼する施設は、NICU・GCU または新生児科を有する周産期医療施設、重症心身障害児通院施設とし、ネットワークサンプリングにより選定する。

②データ収集方法: 半構成面接法

③調査項目: (A. 孫育児力向上) 親との役割分担や協力の孫育児の実際、孫の身体状況や養育上の特徴と孫育児上の困難、(B. 家族関係調整) 家族内の役割分担と困難への対処の実際、家族員同士の調整の実際、家族関係調整上の困難、(C. エンパワメント) 孫に対する思い、親に対する思い、自己が担う孫育児に対する認識、孫育児に関連した感情や役割達成感、(全般) 孫育児支援目標の達成状況と目標達成を左右した要因、これまでに受けた孫育児支援に対する評価、孫育児支援に対する要望

④データ収集手順: ・面接ガイドの作成—上記調査項目を把握するための面接ガイドを作成する。研究対象者の募集—研究協力の承諾が得られた医療施設の看護管理者から、研究対象候補者を推薦してもらう。文書を用いて研究の趣旨や方法を説明し、同意が得られたら研究対象となる。面接調査—面接ガイドに沿って半構成的面接法を行う。面接は許可を得て録音し、逐語録を作成する。

⑤分析方法: 逐語録から、調査項目に関連する文脈を抽出し、要約・カテゴリー化する。

(2) 【研究Ⅱ】 アジア諸国の孫育児及び孫育児支援に関する情報収集: アジア諸国の育児や育児支援に精通した専門家に対する面接調査と文献検索より、アジア諸国の孫育児の実態及び孫育児支援の有無と内容について情報を収集し、本研究における孫育児支援方法への導入を検討する。

(3) 【研究Ⅲ】 孫育児支援方法の試案作成:

①孫育児支援の目標設定と【研究Ⅰ】【研究Ⅱ】の統合: 孫育児支援は、孫育児が孫の個

別性により大きく異なることと、ピアサポートが祖父母のエンパワメントに有効であることから、個別支援と集団支援の二部構成とする。個別支援では A. 孫育児力向上と B. 家族関係調整を主な目標とし、専門家による情報提供や個別の問題への対応を行う。集団支援では B. 家族関係調整、C. エンパワメントを主な目標とし、参加者同士の情報交換と孫育児に伴う体験の共有を行う。具体的内容は、【研究Ⅰ】と【研究Ⅱ】に基づき決定する。  
②孫育児支援方法の試案に関する意見聴取の実施: 【研究Ⅰ】の対象者と育児困難児の家族に対する育児支援を実践している看護職者 5 名に孫育児支援方法の試案を提示し、意見を聴取する。意見に基づき試案の妥当性の検討と修正を行う。

(4) 【研究Ⅳ】 孫育児支援の実施と評価:

①孫育児支援の実施: 研究対象者は、研究協力施設で医療看護を受けている育児困難児の祖父母 10 名程度とする。個別支援は研究協力者が実施する。研究メンバーは適宜支援に参加するものの観察者の立場で支援に同席する。集団支援は、研究メンバーがファシリテーターとなり、研究協力者は専門的知識提供等のアドバイザーとして同席する。支援実施中のテープ録音とフィールドノートから、支援に対する祖父母の反応や祖父母同士の相互作用を把握する。

②孫育児支援の評価: 孫育児支援中に把握した支援に対する祖父母の反応や祖父母同士の相互作用、支援を受けた祖父母に対する質問紙法(先行研究で開発した「孫育児支援目標達成度評価票」の改定版を使用)と面接法による祖父母の評価に基づき、孫育児支援を評価する。

研究が当初計画どおりに進まない時の対応  
研究対象者が計画通りに得られない場合は、研究メンバーのネットワークにより、依頼施設を追加して人材を確保する。先行研究の共同研究者および研究メンバーの所属先と密接な関係にある医療機関への依頼が可能であるため、適宜追加が可能と考えられる。研究メンバーは孫育児支援の経験者であり、孫育児支援の実践能力を十分に有すると考えているが、育児困難児の個別性により適切な孫育児支援が難しい場合には、研究協力者のネットワークや先行研究の関係者から、孫育児支援の実践能力が卓越している看護職者に協力を求めることができる。

## 4. 研究成果

育児困難児を孫にもつ祖父母に対する孫育児支援方法を開発・検証した。「自己の QOL 向上につながる孫育児実践」をめざす孫育児支援のゴールは、先行研究に基づき「孫の養育が順調に進み、父母をはじめとした家族関係が良好であり、祖父母たちが育児経験・人生経験を活用していることを実感する」と設定し、a. 孫育児力向上、B. 家族関係調整、

C. エンパワメント、を孫育児支援の主軸とした。

(1) 育児困難児をもつ祖父母の孫育児の実態把握【研究Ⅰ】：8名の祖父母（男性2名、女性6名）に対して、孫の誕生から現在までの孫育児及び自身の生活全般、孫育児や生活に伴う感情、孫や家族に対する思いに関する半構成的面接を実施し、「孫育児における体験」に該当する文節を抽出・要約してコードとし、サブカテゴリー・カテゴリーを生成した。本研究は研究代表者の所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。孫育児における体験のコードは 284 であり、39 のサブカテゴリー、6 のカテゴリーに集約された。カテゴリーは、【最初の衝撃】、【希望と落胆の揺らぎ】、【孫育児への寄り添い】、【娘/嫁の心理的安寧の見守り】、【息子/娘夫婦の家族機能支援】、【自己実現】であった。

(2) 国内外の育児困難児の孫育児及び孫育児支援に関する情報収集【研究Ⅱ】：育児困難児の孫育児と孫育児支援に関する国内外の文献を収集し、内容を分析した。国外の文献では、育児困難な孫を持つ祖父母の体験が報告されていた。①特別なケアを要する孫をもつ祖父母が初期の悲嘆感情と子どもや孫に対する精神的・経済的支援に焦点を当てた調整過程をたどること、②障がい児である孫との経験における祖父母の感情が、適応（怒りから受容への移行）、二重の悲嘆（子どもと孫の両方にとっての悲しみ）、家族の誇り（困難に適応できる家族の能力）であること、③障がい児の祖父母の主要な体験が、自分自身の感情を保つ（ポジティブである）、自分を捧げる（家族のニーズを優先する）、家族関係を維持する（間に入る、家族の葛藤を整える、他の孫達）、将来の家族の生活の QOL（将来への関心）であること、等が報告されていた。国内外の育児困難児の孫育児支援及び国内の報告はなかった。

(3) 孫育児支援方法の試案作成【研究Ⅲ】：育児困難児の祖父母特有の体験が「孫の疾病や障がいに強い衝撃を受けて苦しみ、徐々に回復・安定へと向かいつつも希望と落胆の間を揺らぎ続け、一方で、息子/娘夫婦を直接的・間接的に支える立場に身をおき続け、常に息子/娘夫婦を気遣い見守る」ことから、「ありのままを受け止め、自分らしく孫育児を行い、家族間の情緒的きずなや家族機能の安定に自分自身が関与していると自ら実感し価値づけられる」ことをめざした看護が必要であると考へ、ナラティブ・アプローチによる孫育児支援プログラムを開発した。プログラムのゴールは、A. 孫育児力向上、B. 家族関係調整、C. 自己実現の3側面から、自分自身の価値を認識することとした。

(4) 孫育児支援の実施と評価【研究Ⅳ】：現在は、プログラムを継続中であり、先行研究で開発した「孫育児自己評価票」のプログラム前後の比較と、孫育児及びプログラムに対する対象者の主観的評価の質的分析を進めている。分析を通して、孫育児評価の上昇と対象者のプログラムの有用性への言及という効果が認められているが、①対象者が自発的なプログラム利用者であることからプログラム前の孫育児自己評価が高い傾向がある、②プログラムの効果と看護スキルの因果関係が不明瞭である、の理由により、プログラムの効果の実証は限定的である。さらに、プログラムが研究協力施設における通常の看護サービス、看護システムとは完全に区別され、研究メンバーが独自に実施する研究的な取り組みと位置付けられ、ルチーンケアとして定着するには至っていない。今後、この孫育児支援プログラムが看護実践現場で普及することを推進するためには、よりたしかなプログラムの効果の実証とマネジメント上の実現可能性を高めることが必要であると考へる。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）

①石井邦子, 佐藤紀子, 林ひろみ, 北川良子, 荒木暁子, 小池幸子, 市原真穂, 小澤治美 : 育児困難な乳幼児をもつ祖父母の孫育児における体験, 千葉看護学会第 19 回学会術集会, 2013.

②Kuniko Ishii, Akiko Araki, Sachiko Koike, Maho Ichihara, Yoshiko Mizuno, Noriko Sato, Hiromi Hayashi, Ryoko Kitagawa, Harumi Ozawa : Experiences of Grandparents Rearing Grandchildren with Special Needs, the 17th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2014.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

該当なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

石井 邦子 (ISHII, Kuniko)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授  
研究者番号：70247302

(2) 研究分担者

佐藤 紀子 (SATO, Noriko)  
千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授  
研究者番号： 8 0 2 8 3 5 5 5

(3) 連携研究者

小澤 治美 (OZAWA, Harumi)  
千葉大学大学院・看護学研究科・助教  
研究者番号： 4 0 3 3 4 1 8 0

北川 良子 (KITAGAWA, Ryoko)  
千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教  
研究者番号： 8 0 5 5 5 3 4 2

林 ひろみ (HAYASHI, Hiromi)  
千葉県立保健医療大学・健康科学部・准教授  
研究者番号： 9 0 2 8 2 4 5 9